

みつめてください あなたをⅡ

～「同和問題等人権問題に関する市民意識調査」が問いかけるもの～

こんなことがありました…。

気づくこと、そこから始まります。

“人権”って、何でしょうか…？

思いをはせる

今でも部落差別はあるのですか？

それでも、そっとしておけば差別はなくなりますか？

「カンケイナイ」

学びの場、そして自分との出会い

「自分の問題」とは…

つながりを求めて



活用にあたって

平成7年(1995年)におこなわれた前回調査から10年たった平成17年(2005年)に、「同和問題等 인권問題に関する市民意識調査」が行われました。この冊子は、その報告書の中からいくつかのポイントを抽出し、作成したものです。

気づくこと、学ぶこと、行動すること、そして、ともに生きる豊かな関係づくりについて、一緒に考えていきましょう。

今後の啓発活動にお役立てください。

「市民意識調査」自由記述から

人と違うことをするのは、とても勇気がいることで、世間の目を気にしてしまう。一人一人は、とても弱い人間なので他の人や周りを見て、差別とはわかっているけれど、自分の家、婿、嫁にはそうあってほしくない、どこかで思っている。自分が一番でなくてもよいが、一番下はいやだという気持ちがいろいろな差別を生み出すと思う。体の不自由な子が子どもの嫁さんにこられたら、もっと他に女の子がいないのと、言ってしまうと思う。

いけないとこととは思いながら、みんな自分の家、子どもが幸せであってほしいから。何が幸せなのかは、わからないけど…。

(40～45才女性)

こんなことがありました…。

2004年2月、鳥取市内での出来事です。

乗客 M	「近いけどいいですか?」「〇〇まで。」
運転手	「〇〇かー、あんなところまでタクシー使うだか?」
乗客 M	「歩けない事情があるので…」
運転手	「歩けん事情があるのに飲みに行くだか?」
乗客 M,N	運転手の言葉と態度に気分を害し、二人で小声で会話をする。 この時点で、発車。
運転手	「他のタクシー会社だったら行ってください。」
乗客 M	「他のタクシー会社さんは快く引き受けてくれます。」
運転手	ため息のような声 〇〇に到着し、乗客 M が身体障害者手帳をだす。
乗客 M	「これをお願いします。」 運転手は無言で受け取りメモをする。
運転手	「じゃいいです。」
乗客 N	「ありがとうございました。」 運転手は無言で走り去った。

これって「差別」!? あなたは、どう思いますか?

あなたなら、どうしますか?

気づくこと、そこから始まります。

日常生活の中にある差別を、「ある」と気づき、認識することから、取り組みは始まります。
市民は、どんな差別があると思っているのでしょうか。調査結果をみてみると…。

表1 「あなたは日本において結婚や就職等社会生活の中で、次のような差別があると思いますか」 (%)

	あると思う	どちらともいえない	ないと思う	わからない	無回答	計
女性に対する差別	59.9 (59.7)	21.4 (18.7)	12.8 (12.3)	3.3 (2.3)	2.6 (6.9)	100.0
障害者に対する差別	67.1 (64.4)	14.9 (15.3)	11.7 (10.0)	3.8 (3.4)	2.5 (7.0)	100.0
アイヌ民族に対する差別	26.1 (33.4)	18.5 (12.1)	16.8 (11.9)	34.8 (34.6)	3.7 (8.0)	100.0
同和地区住民に対する差別	50.9 (58.3)	21.3 (18.2)	15.7 (11.2)	9.6 (6.7)	2.6 (5.7)	100.0
在日韓国・朝鮮人に対する差別	58.2 (59.1)	17.9 (12.8)	8.8 (8.3)	12.3 (12.5)	2.7 (7.4)	100.0
その他の外国人に対する差別	44.2	24.9	12.7	15.3	3.0	100.0
エイズウイルス感染者に対する差別	53.6	16.2	7.2	20.2	2.9	100.0
ハンセン病回復者に対する差別	43.8	17.9	11.1	24.3	2.9	100.0
性同一性障害者に対する差別	42.6	20.6	9.0	24.8	3.0	100.0

()はH7年調査の数値

差別が「ある」と答えているのは、一番多いもので、「障害者に対する差別」の67.1%です。

見ようとしなければ気づかない差別の存在について、もう一度みつめなおしてみませんか。

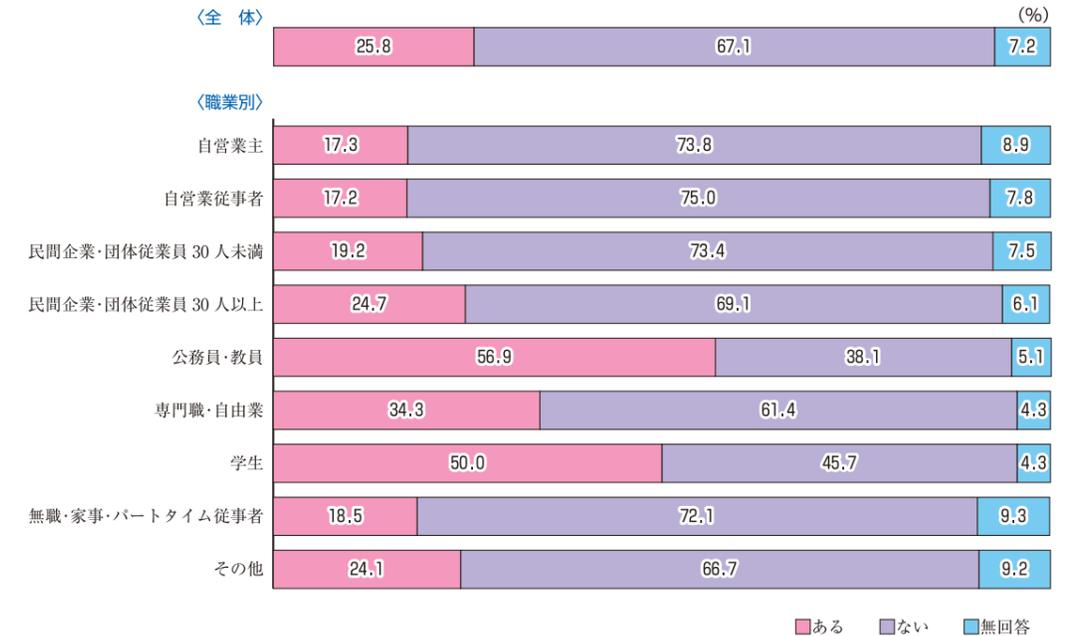
自由記述から

このようなアンケートに答えることで、案外と自分自身の行動と言動等を見つめるよい機会でした。

(70歳以上 女性)

タクシー運転手(1ページの事例)は、研修を受けていませんでした。
あなたの学ぶ機会は…。

図1 「障害者問題についての教育や研修を今までに受けたことがありますか」 (%)



全体で「受けたことがある」人は25.8%で、4人に1人しかいません。
職業別にみると、「ある」が5割を超えているのは、公務員・教員と学生だけです。

教育・研修の機会があること、そして、参加していただくこと、それが大切ではないでしょうか。

タクシー運転手は差別をしようと思ってしたわけではありませんでした。
それは、意図せずに行なった無自覚な差別行為でした。
しかし、被害者は…。

自由記述から

過去のことで、今あることでも、その事実は知っておくべきだと思います。事実に目をそらさず受け止め、よい答えを見つけるまで学ぶことが大事だと思います。私が障害者問題にしても、エイズ問題にしても偏見をもってしまふのは、よく理解していないから。自信がないから。話題にすることを避けてしまふ。問題なのは、やっぱり知らないことだと思う。

(25～29歳 女性)

“人権”って、なんでしょう…?

1 ページの事例から、考えてみましょう。

運転手が発した「歩けん事情があるのに飲みに行くだか？」

“障害者は自由に飲食に行くこともできないのでしょうか?!”とMさん。

Mさんには内部障害がありました。身体障害者手帳を出した M さんに、無言で対処し去って行った運転手。2 次被害が…。

“せめて、身体障害者手帳を出した時点で、差別発言であったことに気づき、謝罪して欲しかった”とMさん。

“人権”は、日常生活のなかにある「自由に移動する」権利や「文化的な生活をおくることができる」権利、「レクリエーション・余暇等に参加する」権利など具体的なものです。それを尊重されなかなただけでなく、人間として対等に接客されませんでした。こういう差別、人権侵害でした。

あなたが考えている人権とは？！

表 2「あなたの人権は、保障されていると思いますか」

調査年度	自分の人権についての保障意識 (%)				
	十分に保障されている	十分には保障されていない	保障されていない	わからない	無回答
平成7年度	39.9	33.0	4.7	20.6	1.8
平成17年度	29.7	35.6	6.5	26.3	1.9

「保障されている」というあなたの“人権”とは？
 「保障されていない」というあなたの“人権”とは？

表 3「あなたは、他人の人権を侵害したり、人を差別していると思いますか」

調査年度	他人の人権への侵害意識の有無 (%)			
	していると思う	そうは思わない	わからない	無回答
平成7年度	11.2	73.9	13.7	1.2
平成17年度	12.3	69.4	17.5	0.8

あなたが考えている“人権侵害”とは？
 あなたが考えている“差別”とは？

“人権”、あなたの言葉で表現してみてください。

みなさんにとって、人権とは何ですか。

「人が生まれながらに持っていて誰からも侵されない権利」？

それは、「衣・食・住」「健康的で文化的な暮らしをする権利」「自由」「平等」「差別を受けないこと」…?

「思いやりや優しさ」？

これは、人間としてとても大切なものです。しかし、一般的、抽象的な人権はありません。英語では humanrights。この“s”は、具体的に数えられる名詞につく複数形を表します。

毎日の生活、毎日の移動、毎日の仕事といったような、生きていくための生活の問題につながっており、実体に根ざしているものです。

ある知的障害者の場合…

夢はヨーロッパ旅行。お金さえあれば行ける？そのお金はどうやって稼ぐ？
 高校は行けるのか？ましてや就職口はあるのか？
 障害者の自己実現のための福祉サービスの選択権の保障、苦情の解決を確保することなど。

医療では…

病院の経営方針で「患者の人権を尊重しましょう」と唱えることは大切です。しかし、大事なことは、インフォームド・コンセントの実行、貧富や社会的地位に関係のない最善の医療を提供することなど。

名前は「ハート・プラス」



このマークは身体内部に障害があることを表現しています。

(注)インフォームド・コンセント：十分な説明をした上で同意を得ること（納得診療）

思いをはせる

被差別当事者や人権侵害を受けた人は、いったいどのような思いでいるのでしょうか。差別の現実や当事者の思いは、聴き、知り、学ばなければわかりません。

●何日も前から体調に注意して…●

今回のことに対し事実を認め、謝罪の言葉や、具体的に何がどんな風にいけなかったのかを聞かせて欲しいと思っていました。終始敬語なしの怒鳴り口調、ため息のような不愉快な声、身障者だと分かっても何の言葉もないし、「ありがとうございました」とは一度も言われませんでした。

帰宅した娘は、すぐにタクシーの運転手さんとのやりとりを私に話しました。なかったことを、わざわざつくり話す訳はありません。身体に障害をもっているため、いつでも自由に外出することができる訳ではないので、友達に心配かけないように何日も前から体調にも注意して、出かけていきました。運転手さんの言動によって、楽しい気持ちが一変して心が傷つき、気分がとても悪くなったことを理解していただきたいと思います。

(乗客 M さん親子の手記)

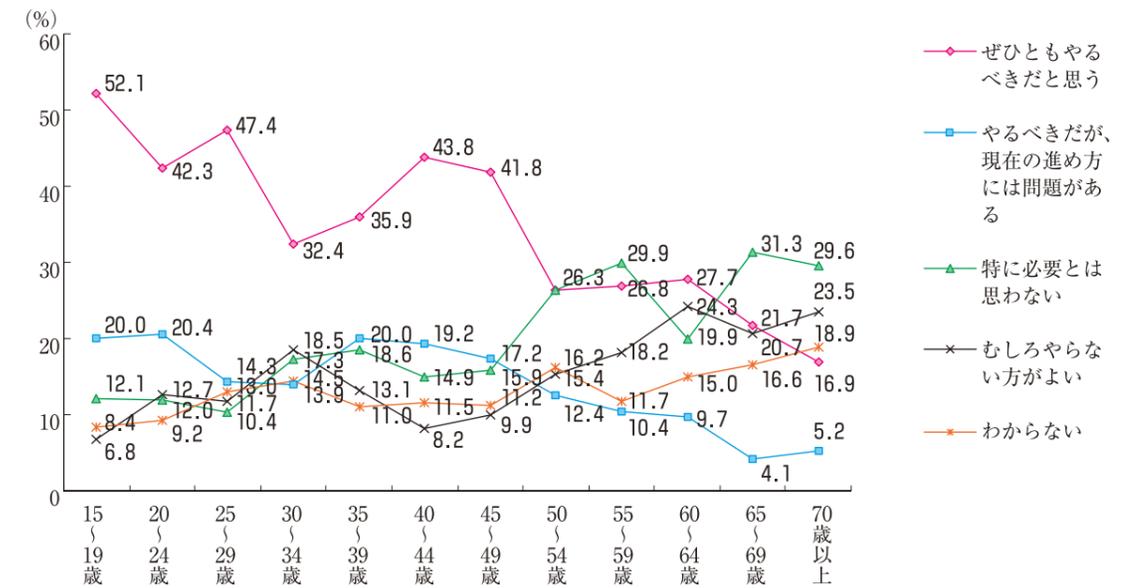
表 4 「鳥取市では小学校、中学校で同和教育が行われていますが、あなたはどのようにお考えですか」 (%)

調査年度	小・中学校での同和教育の必要性	ぜひともやるべきだと思う	やるべきだが、現在の進め方には問題がある	特に必要とは思わない	むしろやらない方がよい	わからない	無回答
平成7年度		33.4	10.5	23.9	16.6	11.5	4.0
平成17年度		32.6	12.7	22.0	15.6	13.7	3.5

約半数の人が「やるべきだ」と答えています。

聴き、知り、学ぶ、この実態は…。

図 2 「鳥取市では小学校、中学校で同和教育が行われていますが、あなたはどのようにお考えですか」



同和教育を受けてきたと思われる世代の人（図の15～49歳までの人）は、「やるべきだ」と多くの人と考えています。しかし、「現在の進め方には問題がある」など、これからの進め方についての課題も提起されており、その進め方に等しいは、改善や工夫をしていくことが大切ではないでしょうか。

●こんな気持ちを味わうことになろうとは●

あるハンセン病療養所で聞いた言葉が忘れられません。「自分の療友は、予防法廃止の前年に亡くなった。最初はなんとかかわいそうと思った。でも、いまはそうは思わない。法が廃止されても何も変わらない現実をみなくてすんだのだから。」また、別の入所者は、「法が廃止されて、久しぶりに兄貴から電話がかかってきた。しかしそこで言われたことは、まさかお前帰ってくる気でないだろうな、という言葉だった。そんなつもりはないから安心しろと言ったが、法が廃止されてこんな気持ちを味わうことになろうとは、思いもよらなかった」と語られた。

…いくら法が廃止されても、社会が変わっていない即ち私たち一人ひとりが、法廃止前と後とで何も変わっていないからです。隔離してきた側が変わらないのだから、隔離の現実が変わらないのは当然といえるでしょう。

(鳥取市人権情報センター機関誌「架橋」15号より)

では、差別の現実とは…。

今でも、部落差別はあるのですか？

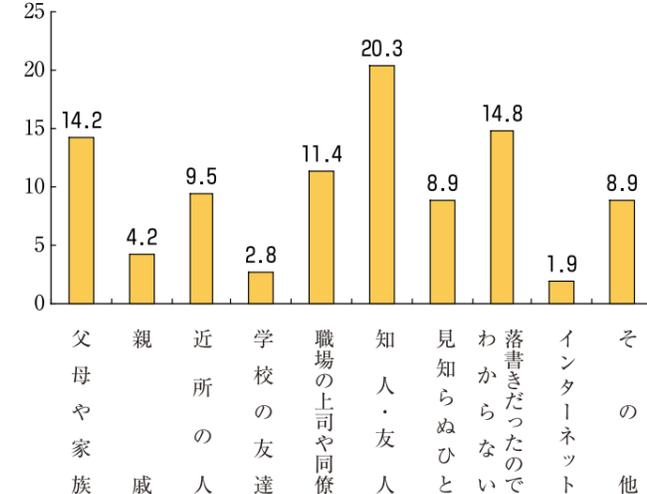
差別は、身近なところに存在しています

表5「あなたは、最近同和地区の人々に対する差別的な発言や行動・落書きを直接見聞きされたことがありますか」

調査年度	差別的な発言や行動、落書きを直接見聞きされたことがあるか	見聞きしたことがある	見聞きしたことがない	無回答
平成7年度		20.6	75.3	4.2
平成17年度		14.9	82.1	2.9

前回調査より「見聞きした」が減っています。しかし、この14.9%というのは少ないようですが、鳥取市民の2万5千人余りにあたります。あなたは、これをどう思いますか。

図3「最近、見聞きしたもので、同和地区に対する差別的な言動をしたのは誰ですか」



「部落差別がある」と答えた人は50.9%(P2・表1)ですが、図3を見ると、差別は身近なところで起きていることがわかります。

「一人ひとりを大切にする」と言われます。それは、どういうことでしょうか。

結婚問題にみる差別の現実

図4「もし、あなたが結婚の時、被差別部落を理由に反対されたらどうしますか」

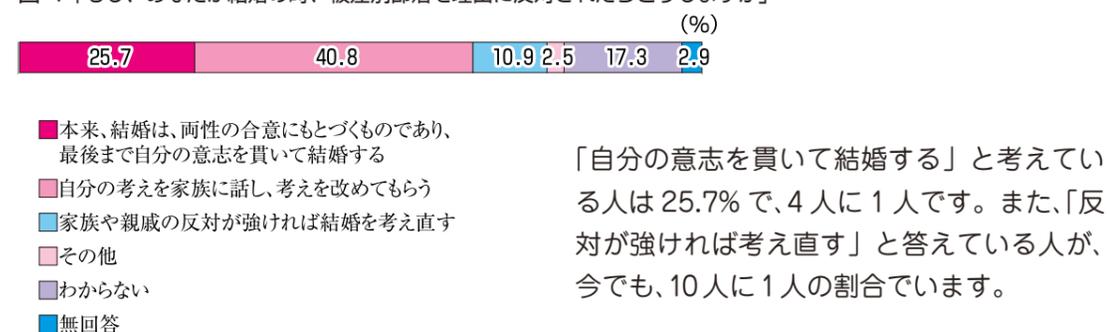
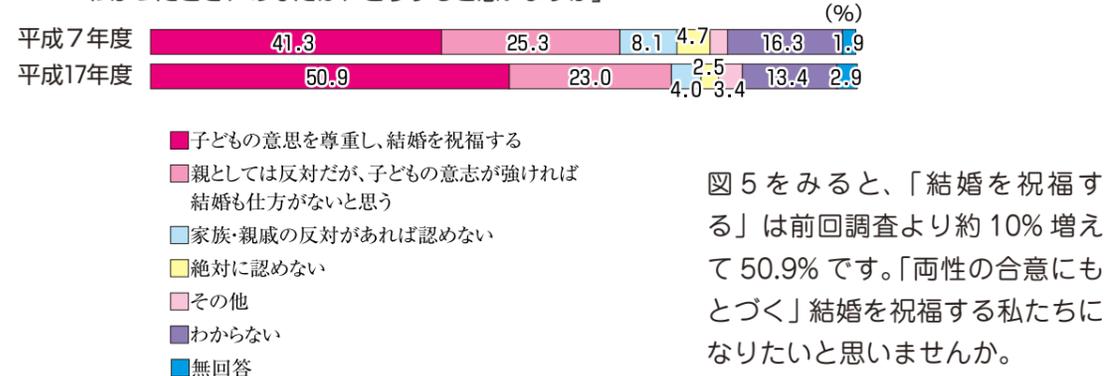


図5「もし、あなたの子どもが結婚しようとする相手が被差別部落の人であるとわかったとき、あなたは、どうすると思いますか」



●こんな差別も●

ある日、友人と喫茶店で雑談をしていたときのこと。「ところで、同和問題のことだけどな、お前どう思う？」と質問をしたところ、突然何を言い出すのかという感じの友人に、大学の「人権論」での課題について話し始めると、友人は急に声を沈めて、「大きな声で同和、同和と言うな。間違われるやないか」「こんな話聞かれたら、自分たちも部落と思われる」と言って、話をさげぎった。

…部落差別は自分たちの世代にも存在していること、そして、それは、「喫茶店での普通の会話」からも排除されるべきものとしての取り扱いを受けるといった厳しさであった。

部落出身者も登場しない、「部落に対する」侮辱や見下しも登場しない、「差別の現実」がここにある。

(ビデオ「今でも部落差別はあるのですか」手引書より)

それでも、そっとしておけば差別はなくなりますか？

差別の現実、そのなかで生きている被差別当事者の思いは…

こんな差別事象が…

同和地区出身かどうかの聞き合せ事象	
いつ	2005年5月26日(木)
どこで	鳥取県東京事務所
だれが	不明(一般市民と名乗る)
内容	一般市民を名のる者から、ある鳥取県職員が同和地区出身者かどうかを問う電話があった。「お答えできない」と答えたところで、電話を切られた。

誰が同和地区出身者なのかを、なぜ調べるのでしょうか。
差別身元調査、あいつぐ戸籍不正入手事件やいまも繰り返される部落地名総鑑事件…。
それでも、そっとしておけば差別はなくなりますか。こういう状況のなかで被差別当事者があじわう苦悩や悲しみ、怒り、葛藤を考えたことがありますか。

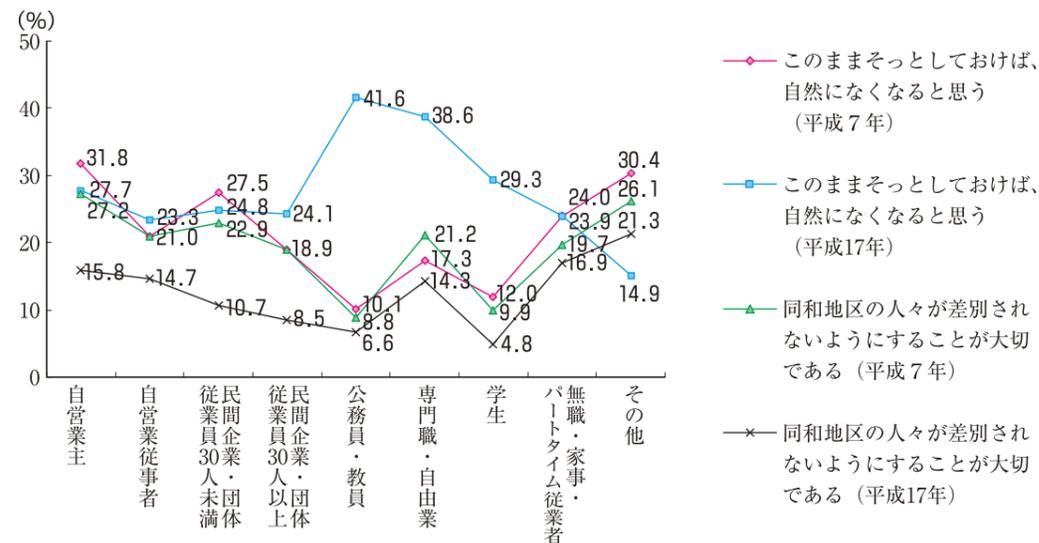
被差別体験

表6 同和地区であるということ差別を受けたのは「どのような社会関係や場面での体験ですか」(複数回答可)

区分		結婚	就職	学校生活	職場や職業上の付き合い	日常の地域生活	その他	不明
平成17年鳥取県調査	鳥取県	23.4	5.2	21.2	27.6	39.4	9.9	1.9

「2005年鳥取県同和地区生活実態把握等調査」によると、約3割の人が被差別体験があると答えています。「ある」と答えた人にその場面等を尋ねた結果が表6です。日常生活の場や結婚などさまざまな場面で差別が存在していることがわかります。

図6 「あなたは、同和問題の解決のためには、どうしたらよいとお考えですか」



前回調査に比べて、「このままそっとしておけば自然になくなる」とする考えの人が増えています。「そっとしておく」ということは、被差別当事者に「差別がなくなるまで我慢しなさい」と言っていることになりませんか。
また、「同和地区の人が差別されないようにすることが大切」と考えている人がいますが、いじめ問題でも言われるように、いじめられている者や差別される側に、その原因は一切ありません。

●見ようとしなければ見えないストーリー、私の部落●

ひたすら部落を隠して結婚し、遠くの地で生活している二人の姉妹。自殺した父親の通夜に帰ってきた二人。連れあい子どもも一緒にではなく、葬式にも出席せずに帰っていくその姿。なんとも辛く切ない。「これを差別に負けた姿」と言えるだろうか。そこまでして隠すもの、守らなければならないものは何か。「命をかけて命を守る」、それは自らの命だけではない。

「ずっと差別されているのは知ってるさ」「人と交わるから、く(気)になるんで、交わらなければ、人が差別しようが気にならねえさ」とつぶやいた、ある村で一世帯だけで暮らす部落のおばあちゃん。だが、長い間手を合わせてきた先祖の墓碑が「差別戒名」だと知って、何も言わずじっと私をにらみ続け、その大きな瞳から落ちた涙。私が伝えなければならない、大切なおばあちゃんにとっての「ふるさと」がここにある。

私にとって「部落」とは、「プラスもマイナスもまるごと含めて」いつもにぎやかで、なつかしい大切なもの。

その部落を隠すことは、このにぎやかで、いつもなつかしい「ふるさと」を隠すことであり、父母を隠すことであり、自分を認めないこと。

「差別」とはその大切な「ふるさと」部落を否定することであり、「絶対に許せないもの」。だが差別は命を奪う。時にはその差別から命を守るために、「逃げ、隠す」ことは必然だと思う。

「許さない」とは、奪われたものを奪い返していくこと、自分自身が「部落をじゃまもの」として奪ってしまっているものを含め奪い返していくことだと思う。

(ヒューマンライットトーク(2006年12月)

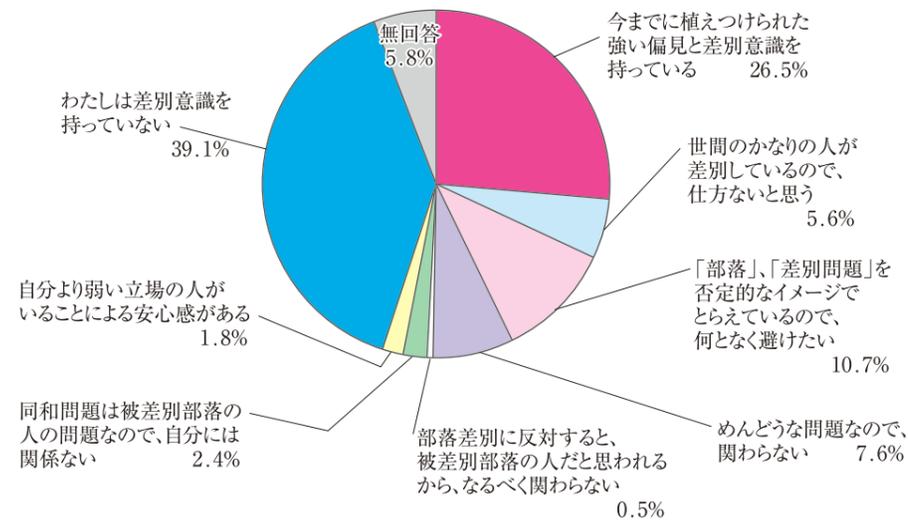
『ふるさと～もうひとつのストーリー～』に寄せられたメッセージより)

「カンケイナイ」

差別を残しているのは…。

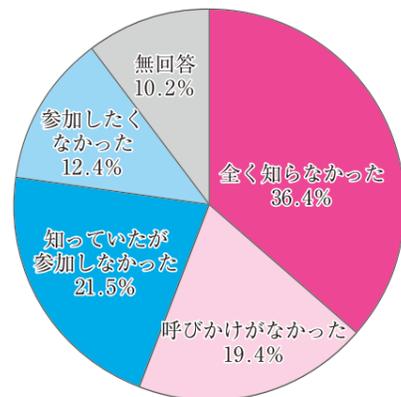
「愛の対義語は、憎しみではなくて無関心。憎しみは愛に変えられるが、無関心からはなにも生まれない」（マザー・テレサ）

図7 「現在でも部落差別が存在していますが、それは、どのような意識だと思いますか。あなた自身の意識に一番近いものをお選びください」



関わりたくない、避けたいと考えている人があわせて2割あります。また、「部落の問題なので関係ない」は2.4%ですが、「差別意識を持っていない」とする39.1%は、「だから関係ない」ということに結びつきはしないでしょうか。

図8 「あなたは、今まで同和教育の講演会・研修会に、なぜ参加しなかったのですか」



知ろうとしない「積極的無関心」、知らなかったという「消極的無関心」、こんな言葉をご存知でしょうか。

自分の問題として考える。気づく、学ぶ、行動する…

表7 「部落差別実態の現状認識」と「同和问题と自分自身とのかかわり」との関連性

同和问题と自分自身との関わり	現在の部落差別の実態認識					計
	同和地区の人たちの問題なので、直接関係ない	差別意識をもっていないので、関係ない	同和问题はすべての人に関わりのある人権問題であり、自分自身の問題としてその解決に努力していく	差別意識はもっているが、解決に努めていない	無回答	
昔はあったが今はない	2.8	66.0	24.1	4.2	3.0	100.0
残されているのは結婚問題だけ	7.5	31.2	41.4	15.5	4.4	100.0
教育・就労の面で差別あり	3.3	25.6	53.3	13.3	4.4	100.0
部落の人々に対する根強い差別意識があると思う	2.8	17.7	57.2	19.0	3.2	100.0
わからない	4.9	47.4	28.0	10.7	9.0	100.0

差別の存在および実態を認識することが、自分自身とのかかわりを認識することにつながるのではないのでしょうか。

表8 「同和问题の講演会・研修会への参加の有無」と「同和问题と自分自身のかかわり」との関連性

同和问题と自分自身との関わり	同和问题の講演会・研修会への参加の有無					計
	同和地区の人たちの問題なので、直接関係ない	差別意識をもっていないので、関係ない	同和问题はすべての人に関わりのある人権問題であり、自分自身の問題としてその解決に努力していく	差別意識はもっているが、解決に努めていない	無回答	
参加したことがある	3.2	28.4	50.4	12.0	6.0	100.0
参加したことがない	5.6	49.4	23.3	14.7	7.0	100.0

参加したことがある人は、「自分自身の問題として」とらえ、参加したことがない人は「関係ない」ととらえている人が多いようです。まず、参加してみましょう。

自由記述から

県外から来た人で、「私は被差別部落、同和问题などという言葉さえ聞いたことがなく、まったく知らない。だから差別したことがない」とPTA(小学校)の会合などで言われる方がいます。人権問題として大変なことなのに地域によってこんな格差があるのかと驚きました。無知であること、無関心であること、これがいつまでも差別がなくなる原因だと誰かが言われました。まったくそのとおりだと思います。まず、差別は自分の問題だととらえることが大事だと思います。子どもたちにも同和教育というのは必要なことだと考えます。
(40～45歳 女性)

学びの場、そして自分との出会い

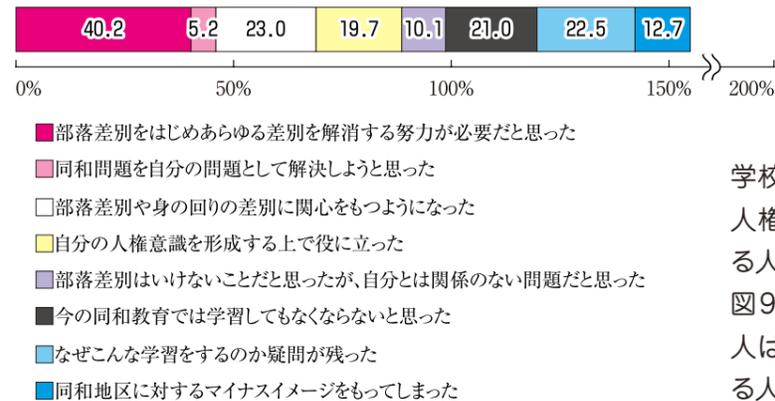
「自分は差別していないから何もしなくてもいい」 そう思っていたAさん、それを変えたものは…

次ページの『私を変えた出会い』（Aさんの手記）を読んでみてください。

- ・研修への参加
- ・中学校時代の同級生の思いにふれ、自分のことだと思ひ愕然としたこと
- ・わが子、先生、周りの人々の反響
- ・行動することで自分が変わり、新たな関係づくりがはじまる

学ぶことで得るもの

図9 これまで学校で同和問題をはじめさまざまな人権問題の学習をして「どんな印象をもちましたか」（2つ以内で選択）



学校で同和問題をはじめとする人権問題の学習をしたことがある人は59.5%でした。図9にあるように、学習を受けた人は、肯定的な印象をもっている人が多くいます。

表9 「同和問題シリーズを読んだことがあるか」と「同和問題と自分自身とのかかわり」との関連性 (%)

同和問題と自分自身とのかかわり	同和地区の人たちの問題なので、直接関係ない	差別意識をもっていないので、関係ない	同和問題はすべての人に関わりのある人権問題であり、自分自身の問題としてその解決に努力していく	差別意識はもっているが、解決に努めていない	無回答	計
市報「同和問題シリーズ」を読んだことがあるか						
いつも読んでいる	1.6	19.8	66.0	8.2	4.4	100.0
たまに読むことがある	3.9	32.7	44.0	12.7	6.7	100.0
読んだことはない	5.0	48.3	25.9	15.3	5.6	100.0
市報自体をあまり読まない	5.7	35.0	38.8	12.6	7.9	100.0

読んだことがある人は、自分の問題としてとらえている人が多いことがわかります。学ぶことの大切さを現しているのではないのでしょうか。

『私を変えた出会い』

小学校時代は、ほとんど同和教育を受けていません。一度映画を見たくらいです。「部落差別」って昔のことだと思っていたけど、今でもあるのかな?」と思ひ親に話すと、「そういうことには関わらなくていい。黙っとればいい」と言われて、学校で習ったことより、その言葉の方が印象に残ってしまったんです。

中学校時代は、同和地区の生徒と友だちとしてつきあっても、部落差別の話になると、私は知らないふりをしたり、逃げたりしていました。

その後、部落差別の厳しさを実感する出来事に何度か出会いましたが、「自分は差別していないから何もしなくてもいい」と思っていました。

そんな気持ちを変えたのは十数年前、中学校時代の同級生で同和地区出身のBさんとの再会でした。

私が参加した保護者研修会の講師がBさんだったんです。

「中学校の時、友だちが部落差別の話になると逃げていくのがつらかった。そういう人は自分でも気づかないうちに心の中で差別していると思う…」

その言葉を聞き、自分のことだと思いました。「私は差別をしていたんだ…」と思ひ、愕然としました。

後日、勇気を出してBさんに会いに行きました。Bさんからいろいろな話を聞き、知ろうとしないことも差別意識の表れだとわかりました。それまで気づけなかった自分を情けなく思いました。

その気持ちをBさんに伝えと

「気づいてくれただけでうれしい。これが

らは一緒にがんばろう」と言ってくれたんです。Bさんの心の広さに胸が熱くなりました。

その出来事を小学校のクラス懇談で話すと、先生から「その話を子どもたちにしてもらえないだろうか」と頼まれました。初めてのことで自信もなく、わが子の立場も心配でしたが、「お母さんが話したいならいい」と背中を押され、引き受けることにしたのです。

当日は研究発表会でもあり、大勢の人が訪れました。「差別を受けたという話はよくあるが、差別をしていたという話は初めて聞いた」と、大きな反響があったようです。そこで、「なぜ、差別する側は何もしないんだろう」という疑問が浮かび、だんだんと怒りがわいてきました。

差別を受けている人が状況を変えるのは難しい。差別している人や、それを見過ごしている周りの人が変わらなければ差別はなくならない。そのことに気づける人を増やしていきたいという思いで、現在まで活動を続けてきました。

私は、先生でもなければ専門家でもありません。自分が経験したことしか話せません。でもそうやって行動していくことで何かが変わっていくと信じています。私自身、まだまだ気づいていないこともたくさんあると思います。気づけるように、これからも学習を積み重ねていきたいと考えています。そうすれば、また新たな気づきが生まれて、行動へとつながるはず。差別する立場の人が変わらなければ差別はなくなりません。

（とっとり市報

「同和問題シリーズ」2007年2月号より）

「自分の問題」とは…

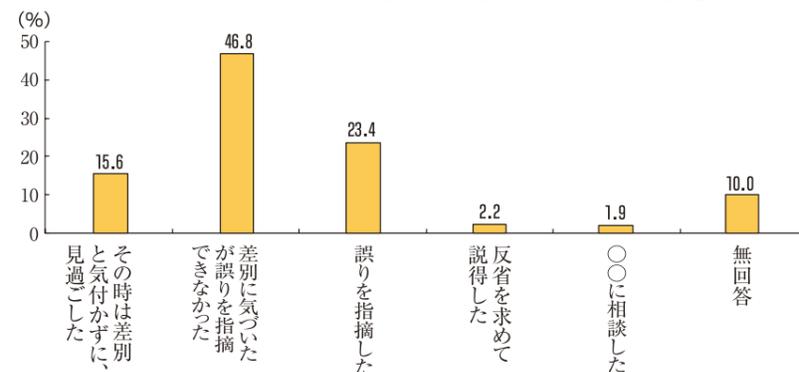
「自分の問題」として取り組むことが大事だといわれます。では、その「自分の問題」とは、どんなことなのでしょう。

自由記述から

自分の頭で考えていくことが大切だと思います。講演会などで話を聞いてわかったつもりになるのが怖いです。話を聞いて、「じゃあ、自分はどうなのかな」とか「自分の周りに似たことはなかったな」と振り返り、見つめていくことで、次に自分ができそうなことが見つかる気がします。「私は将来、結婚するときに反対されるかもしれません」と大勢の人の前で話をした16歳の部落の子の発言は、たった16歳の子にここまで言わせてしまっているこの差別の現状に怒りを覚えました。私がこうやって言わせている一人なんだと悔しく思いました。簡単な問題ではないですが、でも取り組んでいかないといけない大切なことだと考えます。

(40～44歳 女性)

図10 「見聞きした差別事象。そのときあなたはどのようにされましたか」



自分の問題とできているかどうかは、差別に出会ったときにとるあなたの行動からもみることができます。「誤りを指摘した」人は23.4%で、「説得までした人は」わずか2.2%しかありません。誤りを指摘するだけでなく説得できるようになることが大切です。「見過ごした」人は、他人の差別行為を差別だと気づいていないというだけでなく、自分自身の差別行為にも気づいていないことが考えられます。また、「誤りを指摘できなかった」人が約半数います。

指摘できなかったのはなぜでしょうか。

この調査の別の質問で、4割の人が「同和問題を自分の問題として考える」と答えていますが、図10をみると、今一度「自分の問題」とはどんなことかを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

●“おまえ自身はどう向きあうんや？”●

「障害者」介護。なんだかいい響きだし、かっこいいかも…。大学生になったほうが「障害」者介護を始めたのは、そんな軽薄な理由からでした。でも、それはぼくの人生が変わってしまったといっけいぐらいの出会いだったのです。

ぼくが介護に入った、脳性マヒ「障害」である彼は「ぼくら「障害」者に対する差別とおまえ自身はどう向きあうんや？」とぼくにつけてきました。そんなこと考えたこともなかったぼくは、偏見のかたまりみたいなもの。介護を通してぼくの差別的な価値観が表に出てくるわけで、そのたびに「おまえ、それがどういうことかわかってるのか！」って。もちろん、ぼくにとっては、きつい言葉でしたが、彼だってぼくの差別的な価値観や偏見につきあうのですから、大変なはず。それでも彼はぼくと向きあってくれるのです。

彼とは5年のつきあいになりますが、正直、何回かはやめたくなくなりました。「ひょっとしたら、おまえの介護でオレは殺されるかもしれん！」なんて言われたときには、「なんでそこまで言われ

なあかんねん！」って気持ちになりました。でも彼にしたら「生きるか死ぬか」。彼は「障害」者でぼくは「健全」者。立場的に、ぼくは差別する側にあるのだ、そういう関係性からも考えさせられることがたくさんありました。

彼は『青い芝』などで活躍したバリバリの運動家。あたっちゃったっていうか、めぐりあっちゃったんですね。(笑)。「オレとどう向きあうんだ」と問いかけてくれる人に。だから、自分自身が納得できるまでやりたいし、今、まさに差別をうけている「障害」者が目の前にいるという、その事実と向きあいたいし、重みというか、そんなことや、先輩やなかまたちからの影響もあって、ここまで来ました。

「障害」者とつきあうと彼らにはどうい差別の歴史があり、それとどうたたかってきたのかということを知りたくなります。その人を知りたくなるんですね。今、ここに、ぼくのすぐそばで生きている、この人のことを何も知らないではすまされないうらうって気持ちになるんです。

—(子ども情報研究センター機関誌「はらっば」269号より)—

つながりを求めて

人は人との関係の中で幸せを感じたり、不幸せを感じたりします。差別は人と人との関係を断ち切るものです。人が人として生きていくことは、自分であることに安心し、他者と認め合いながら共に生きていくということではないでしょうか。

●私を選んで打ち明けてくれたということ●

私にとって、生涯忘れることのできない友達と出会うことになりました。彼は、血友病の患者でありまして、草伏村生というペンネームを持っていました。その彼と知り合って一年くらいたったとき、今でも忘れるとこはできないのですが、1987年9月28日に、私の友人である彼から、「実は自分はエイズウイルスに感染しているのだ」ということを打ち明けられたわけです。そのときの衝撃といいますか、自分の友人がエイズウイルスに感染しているということ自体も重かったのですが、“彼が私を選んで打ち明けた”そのことをどう受けとめたらいいのかということ、深く考えさせられました。... そのあたりから私の人生が少しずつ変わってきたような気がします。

(「架橋」15号より)

●身近で大切な存在になっていた●

どうして、私はハンセン病問題を追い求めるのだろう、この原稿を書きながら何度となく自問自答した。その度に思い浮かんできたのが、これまで出会ってきた、ハンセン病問題をはじめ様々な差別解消のために自分の命を削るかのように今なお闘っている人達の姿であった。この方達と出会い、おつきあいさせていただき中で、どこか、遠くの出来事であったことが、いつの間にか、身近なことへと変わっていったのである。/その姿勢からは、人間らしく生きること、こころ豊かに生きることが問いかせられ、自分の在り様を考えずにはいられなかった。対話を重ねる中、かまえていた壁が少しずつ低くなり、気がつく、自分の弱さをさらけ出すようになっていた。世間のしがらみにがんにがらめになり苦しんでいた私を助けてくれたのは、ハンセン病回復者の方だった。いつのまにか、私の中で、ハンセン病回復者の方は、身近で大切な存在になっていた。そして、誰だって、身近で大切な存在である人が苦しんでいた、困っていたりすれば、何か力になれないかと思うであろう。私がハンセン病問題を追い求めるのも、それと同じであった。/私がハンセン病問題を通して学んだことは、つきなみな言葉かもしれないが、やはり「こころ豊かに生きる」ことを自分自身に問うていくことだと思ふ。そして、問いかける仲間を増やしていくことだと思ふ。

(「架橋」15号より)

自由記述から

私は21歳で結婚して、今おなかに赤ちゃんがいます。その赤ちゃんの父親は、同和地区の出身です。高校のときから付き合っていました。最初彼と付き合いだして彼が同和地区の人だとはまわりから聞いて知っていましたが、2人でそれについて話すこともなく、彼から話してくることもありませんでした。

高校卒業間近になって彼が友人から部落差別を受けました。彼は、それでも何も言いませんでした。でも、学校に来ない、いつもとちがい変だと思ったので、担任の先生に相談しました。大好きな人が苦しんでいるのに何もしてあげられないのがくやしい気持ちでいっぱいでした。すると担任の先生は、彼は今あなたに話すことを苦しんでいるから、あなたから手をかしてあげれば彼は心を開いてくれるよと教えてくれました。それで、私から彼に自分の思っていることをすべて伝えたら彼はとても喜んでくれました。それから2人でいろいろ話をして私は生まれてはじめて真剣に差別について考えるようになりました。

人は実際に自分で経験したりしなければわかりません。学校の紙の上での授業やテレビの中のことを書いてあったって生徒には通じてないです。現に私がそうでした。

私はこの事で、少しでも役に立てたらと思ひ、卒業してから自分の高校で担任の先生が受け持ちの1年生のクラスで自分の経験話をしました。私とは3つか4つ年下の子達でした。

授業が終わって書いてくれた感想文を見て、私はやっぱり今まで学校でしていた差別問題が、統一されていないなと思いました。みんな書くことは似ていますが、その感想文の裏側(心の中)は、私の話をダイレクトにうけとめてくれた子、表面で書いてくれた人とさまざまでした。結局はその人の意識のもちようで、どんなに熱心に授業しても生徒の受身で変わってきます。どれだけ、生徒の心と一緒に考えていけるかではないでしょうか。家庭も大事だと思います。

私の両親は、私たちの知らないところで部落差別について勉強したり考えたりしています。今まで部落出身者だと反対していたのに、今は、誰よりも彼を守ってあげたい気持ちでいっぱいだそうです。

(20～24歳女性)

みつめてください あなたを

Human rights

「同和問題等人権問題に関する市民意識調査」の概要

この冊子の作成のもとになった「同和問題等人権問題に関する市民意識調査」は、平成 17 年に、鳥取市における、同和問題等をはじめとするさまざまな人権問題について、市民の意識の現状とその傾向を把握することにより、今後の人権行政を推進する上での検討資料とするため、併せて、条例に基づく第 4 次鳥取市同和対策総合計画策定にあたっての参考資料とすることを目的に実施されたものです。そして、その「報告書」が平成 18 年 3 月に作成されました。

調査は、合併後の鳥取市全域の市民で、満 15 歳以上の者を母集団（170,957 人）とする標本調査で、住民基本台帳から 18 の中学校区単位で 5 歳区分の年代別に無作為抽出を行い、3% にあたる 5,200 人の標本抽出を行いました。

性別	割合 (%)	回答者数 (人)
男性	37.2	1,033
女性	49.3	1,369
不明	13.5	376
総数	100.0	2,778

手順については、平成 16 年度に調査項目検討委員会を設置し、協議によって作成された調査票を郵送する方法で行いました。回収率は 53.4%、有効回答数は 2,778 件ありました。回答者の構成は、以下のとおりです。

みつめてくださいあなたをⅡ

～「同和問題等人権問題に関する市民意識調査」が問いかけるもの～

平成19年(2007年)3月発行

編集 (財)鳥取市人権情報センター
鳥取市幸町151 鳥取市解放センター内
TEL 0857 (24) 3125 FAX 0857 (24) 3444
URL <http://www.tottori-jinken-joho-senter.or.jp/>
Eメール: info@tottori-jinken-joho-center.or.jp

発行 鳥取市
鳥取市尚徳町116 鳥取市総務部人権政策監同和対策課
TEL 0857 (20) 3144